

【源泉交遊】

市当局のチャランポランの危険性

「黙って座ればピタリと当たる！」と言うほどの「問題解決型図書館」を当局は目指している訳ではないことは理解できますが、公権力をバックに「問題解決型」と言われても「なんでやねん！」と引けてしまいそうになるのは庶民のひがみでしょうか。身近な人からの親切なお節介なら「ありがとう」と素直に言えることでも、その筋の人から言われる筋違いのお節介には無意識に身構えてしまうのは悪い癖なのでしょう。多分身近な人からのお節介には個々人に対する個別の親切心が感じられても、公権力をバックにしたお節介には、一束ひとからげにした全体主義の匂いがするからかもしれません。良いと解っていることでも、時と場合、そして相手によっては有効でも、個別には障害にもなることがあるということだと思います

現在当市の図書館政策は「東図書館の“犠牲”により、素晴らしい中央図書館を創る」との思想が底辺にあるようですが、この考え方は強権的であり独裁的なものとあまりにも親和性が強いと感じられます。民主主義の時代の現代社会に於いて、いわばその陰において独裁に繋がる強権体質がひしひしと忍び寄って来ているように思えます。それは「個人の犠牲はみんなの幸せ」とする全体主義のフレイズの中に取り込まれようとしていると見ることもできます。これが強権好きであった前市長の趣向とダブリ、前市長の下で腕を磨いてきた二人のゾンビの仕業でもあるようです。しかもその後ろ盾に居るのが現市長ということになります。二人の福田氏は二人で重連となって力を増し、最強である上に行政の長まで後ろ盾にしているようですが、それが益々時代逆行への力を強めているようで、反転して正常化することを困難にしているようです。ゾンビ達が描く新しい図書館像は時代を逆行する方向を向くのは当然の帰結です。(参考「時代に逆行する図書館行政」舞鶴市民新聞 令和6年5月17日付け)。それでも当局は方向転換をしようとはしません。ここに問題の核心が隠されているようです。しかしそれらを解明するためには、当局の理解と議会の協力が欠かせませんが、当局の図書館管理の中樞を担う生涯学習部は、本来図書館を管理充実し発展させるのが使命であるのに図書館潰しに懸命であり、いわばチャランポランの状態です。議会はトンチンカンが横行するありさま、おまけに外部から招いた大学の先生は「出来のよくない教授」と言うのでは三方塞がり迂闊にももの言えない環境にあり、まともな議論すらも出来るものではない状態です。本来ならここで市長が出てきて采配を振るべきなのですが、市長はゾンビに取り込まれ身動きが取れない異常な常態にあります。しかしこれは市長にとって大変危険なことです。なぜなら、すでに現行する「中央図書館構想」は失敗が見透視できる段階にあり、その原因人物と親密状態を保つことは、失敗の責任も背負い込むこととなるという事であり、賢明な人間なら失敗を呼び込む人と手をつなぎ一緒に失敗を負い続けることは危険であり、自らの政治生命に傷をつけることになるということです。